SHORT ESSAY

俳句は日本語でこそ

八木　健

Ken Yagi

やぎ・けん　1940年、静岡県生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。元NHKアナウンサー。NHK・BSのテレビ句会「俳句王国」の司会を担当。月刊俳句総合誌「俳壇」に「八木健の句会訪問にしひがし」を連載。著書に「八木健の皆さん俳句ですよ」。各地で俳句をビジュアルな作品に仕上げた「ハイクアート展」を開催

平成十二年九月二日放送の「俳句王国」は日本在住の外国人の大会だった。米、仏、露、イラン、オーストラリアの方々。ゲストはタレントのヒロコ・グレースさん。収録前夜の懇親会で示唆に富む話を聞いた。マブソン青眼さんは三十一歳のフランス人男性。早稲田大学で俳文学研究の傍ら、長野県の高校でフランス語を教えている。「俳句王国出演は大変にうれしいです。日本語で句会をすることをずっと夢見ていました。通常、外国人は母国語でなく、その国の言葉で文学作品をつくります。そうなっていないのは日本文学だけでしょう。フランスではフランス語が母国語でないたくさんの人がフランス文学をやっています。日本文学もそういう時代が確実にやってきます。ですから、外国人に母国語で俳句をつくることを奨励するよりも日本語で俳句をつくる外国人を応援した方が、未来に大きな力となるのではないかと思います。と申しますのは日本語は俳句のための言葉だと思うからです。日本語は語彙が豊富でどんな国の言葉にもまさるものです。そして季語には外国語に翻訳できないものがたくさんあります。若葉と青葉の違いとか外国語では無理なことです。竹の秋とか外国の言葉では深みを出すのが難しい言葉もありますね。今後は外国人どうし、日本語で高いレベルの俳句をつくってゆきたいと思います。私は当初フランス語で俳句をつくっていましたが、ずっと悩んでいました。どうもフランス語では深みが出ないと思っていたのです。六年前にはじめて日本語で俳句をつくりました。それ以来、日本語で俳句をつくっているわけですが、最近、日本の俳人が『母国語の三行詩を俳句として認める』としているのは理解できません。しかも季語はなくてよいなどと。日本古来の俳句の素晴らしさを誤解させてしまいます」とマブソンさん。俳句の将来を真剣に心配してくれている。昨今の「HAIKU」ブームは「日本文化の輸出である」とは耳に心地よい響きではあるが。